

〈現代語訳〉から始まる古典和歌の理解

— 『古今和歌集』から派生する多様性—

中田幸司

要約

古典和歌の〈現代語訳〉は多様性を学ぶための宝庫である。和歌を教授／享受するには対象のテキストを読むことが求められる。ただし、テキストは原典の存在した往時から今日まで、時代の推移の中に置かれ、書き手も読み手も、さらに伝達手段でさえも紙媒体からデジタルデバイスへと変化しつつあり、動態として認識されるようになった。だが、媒体は進化してもテキストのみから内容を理解できる人ばかりではない。そこにはつねに〈現代語訳〉が求められたのではないだろうか。これまで単にテキストを理解する役割として補助的／従属的に用いられた現代語訳ではなく、より和歌の教授／享受に有効な機能と活用手段を〈現代語訳〉に見出す必要があるだろう。その結果、さまざまな場面で多様性が求められる現在、〈現代語訳〉には多様性を具現化した要素があるのとらえなおす必要がある。また、〈現代語訳〉はテキストの理解にとつて間テキスト性の意義をもち、和歌をはじめ古典文学全般の理解には欠かせないことを論じたい。

キーワード：〈現代語訳〉・古今和歌集・多様性・間テキスト性

一、はじめに——問題意識とその背景、時代が求める多様性と〈現代語訳〉

時代は多様性を求めている。LGBTQの認識が広まり、地球環境問題に対してSDGsが本学の文化祭「コスモス祭」でも強く意識され、何よりも新型コロナウイルスが蔓延したことによって日々新たな情報と国民の対応が求められてきた。この時代は新型コロナウイルスの影響を受けて始めて二年目ということもあり、音楽業界・演劇

業界といった文化事業を担う人々の創意工夫によって活気をとりもどしつつある。このような時代に古典文学関係では二〇二二年度から実施の高等学校学習指導要領に伴って国語の選択科目「古典探究」の扱いに対する議論が起き、教科書にもっとも多く採録される中古（平安朝）文学は危機下にあるととらえる論考が刊行されたり⁽¹⁾、「病」をテーマにした配信や論考が発表されたりした。特にこの時代を反映する用語として「人流」・「抑制」など聞きなれぬことが用いられ、ことばの再定義化が起きている。その上で、教育現場に影響を

所属：文学部国語教育学科

受領日 二〇二二年一月二四日

与えたのが「教育の導入である。ひとり一台のタブレット端末の支給が「GIGAスクール構想」のもと文部科学省から教育委員会を経由して推進された。大学教育では対面／遠隔の二者択一から、両方を取り入れる「ハイブリッド／ハイフレックス」が中心となり、学生は新たな〈紙とエンピツ〉〈チョークと黒板〉によつて学び始めた。一方で社会においてもこのような時代下こそ人文学をはじめとした古典文学に向き合う必要性が求められた³⁾。

さて、近時この古典文学は「テキスト遺産」としてとらえなおされている⁴⁾。テキストを教授／享受する過程ではこれまでも現代語訳が注釈という観点から論及されたが、稿者もまた、和歌の現代語訳について改めて考え直す必要性を抱いている。そのきっかけは小学校・中学校・高等学科の教員を目指す学生との議論や高校生との高次大連携授業時の交流をはじめ、海外の古典文学研究者の「遺産」の発言から刺激を受けたことにある。

以下、テキストの教授／享受における現代語訳を再検討したい。それは一般の現代語訳とは異なり、そこにかかわったさまざまな人々の多様性が内包され言語化されたものと再定義化を図る。このときには〈現代語訳〉とし、第三者の引用時には「現代語訳」とする。同時に複数の〈現代語訳〉を用いることの有効性と成果——多様性の宝庫としての理解——、間テキスト性を有する機能——テキスト理解の始発となる役割——のあることを念頭に置き、研究の状況と教育への効果を視野に入れて論じる。

二、「訳／訳す」と〈現代語訳〉としての再定義

江戸時代の国学者本居宣長は、その著『うひ山ぶみ』⁵⁾において、

段々学問に入りたちて、事の大小も大抵は合点のゆけるほどにもなりなば、いづれにもあれ、古書の注釈を作らんと早く心がくべし。物の注釈をするはすべて大きに学問のためになること也。

と述べ、国学の初学者に向けて古典の注釈の作成を心がけるように説いた。同書は記紀をはじめ『万葉集』への言及が主たる対象であるが、『古今和歌集』(以下、『古今集』)に關しても『古今集遠鏡』を寛政五(一七九三)年頃に著している。この際の和歌の雅語を俗語に訳した功績はいわゆる現代語訳の嚆矢として位置づけられ、宣長の言行一致の姿勢が見て取れる⁶⁾。

『古今集』は十世紀初頭、延喜五(九〇五)年に、日本初の勅撰和歌集として編纂され、今日に至るまでに日本人の価値観を象徴する景と情を含む歌集として伝わる。四季と恋を二大部立に置き、後世、和歌に限らず散文の文学にも広く影響した。ただし、この歌集は、醍醐天皇の勅命に至る背景——九世紀後半から十世紀初頭にかけての国の施策や往時の政治権力がいかに反映されたのか——、また、成立時期と序(仮名序・真名序)の内容の整合性など、和歌の教授／享受についても問題が残る。

本稿では特に『古今集』に採録された和歌に着目し、その現代語

訳が抱える問題を確認し、近年の和歌の現代語訳の状況をいかに理解し、〈現代語訳〉として活用すべきかを考える。ここにいう〈現代語訳〉は前述に加え次のような特徴が考えられる。第一に教授／享受の段階と詠出往時の段階では時代間格差や地域の言語や文化の差、あるいは個人の価値観など多くの要因から、そのままでは〈ワカラナイコト〉が生じていた証であることを示している。第二に今〈ワカルコト〉を旨指し、訳者たちが考察した成果である。〈ワカルコト〉と判断する第一読者は訳者自身(ないしはその周辺の協力者)であるということも示している。第三に新たな知見や価値観が加われば〈現代語訳〉は改訂される可能性をつねにもち、いわゆるイマ・ココにおけるひとつの到達点と考えられる。このため、動態であるという認識が生じる。第四に特に初学者にはテキスト以上にそれを理解する上で必要とされる傾向があるということ。この点からいうと、〈現代語訳〉は和歌を理解する上での到達点であると同時に、初学者にとっての始発点にあたる。〈現代語訳〉の再定義はここに始まる。

そこで、改めてそもそも訳とは何を意味するのか。古代中国の字書『説文解字』⁽⁷⁾には、「傳譯四夷之言者」とあり、同書を引く字書のひとつ『字通』⁽⁸⁾にも、

旧字は譯に作り、畢(えき)声。「説文」三上に「四夷の言を傳譯するなり」とあって、異言を通ずることをいう。

とあり、異なる言語に通じることが根本的な意味とされる。他言語

に通じるといえるのは同時代における理解と、異なる時代において生じる理解との双方があるが、日本の文学史上においては、『日本書紀』推古紀十五年七月戊申朔庚戌(三日)の条に、小野妹子が遣隋使として遣わされた記事には、

秋七月戊申朔庚戌、大礼小野臣妹子遣_二於大唐_一。以_二鞍作福利_一爲_二通事_一。

(秋七月の戊申の朔にして庚戌に、大礼小野臣妹子を大唐に遣_す。鞍作福利を以ちて通事とす。)(太字・傍線部稿者、以下同じ)⁽⁹⁾

とあり、鞍作福利が「通事」(通訳)を担うため同行している。この推古紀の記事は後世、明治政府のプロジェクトとして刊行された『古事類苑』に「譯語」の用例としてあげられる⁽¹⁰⁾。古代における「譯語」の基盤には同時代において外国語から日本語へと、通じなかつた言語を通じさせる意義があつたといえよう。今日の『大漢和辞典』⁽¹¹⁾の「譯」の項目には第一項に、

一 つたへる。のべる。うつしいふ。他國の言を自國の語になほして其の意を通ずる。又、其のことを主人人。

とあり、『説文解字』の用例をあげるが、これもやはり前述の推古紀の「通事」に通じる内容といえよう。さらに、

二 わけ。わけをとく。経義をときあかす。

とあり、儒家の五経を解き明かす意味として説明される。今日の古典の意味を理解する上で用いられる「訳」の意味に近似していると考えてもよいだろう。一方、現代の国語辞典の代表的な『日本国語大辞典』⁽²⁾によって名詞「訳」と動詞「訳する」をみると、

(1) 訳すこと。また、その訳した文字や文章。

* 正法眼蔵〔1 2 3 1〕5 3〕転法輪「旧訳あり新訳ありといへども、疑著するところ、神龍年中の訳をうたがふなり」

* 野分〔1907〕〔夏目漱石〕二『何の草稿だい』『地理教授法の訳（ヤク）だ』

* 司馬相如— 喻巴蜀檄「康居西域重訳納貢、稽来享」

(2) 漢字を和訳すること。また、その訳した訓。和訓。よみ。訓。

とあり、(1) は平安時代より時代が下る道元の仏教思想書『正法眼蔵』を例にあげ、仏教の経典を理解することとする。また、(2) は漢字を和訳する点をふまえると、中国語から日本語へ通訳する推古紀の記事に通じる。また、動詞「訳する」をみると、

(1) 意味・内容を明らかにする。ときあかす。解釈する。

(2) ある国の言語・文章を、他の国の言語・文章に移し替える。

翻訳する。

(3) 古語・漢語による文章を現代語による文章になおす。解釈する。

のように(1)には広範囲に解き明かす意を示し、(2)には外国語を翻訳する意を示している(ただし、「和訳」など日本語に限定はしていない)。(3)には古語、現代語のように過去の文章を現代語になおし、漢語からは過去も現在も双方ともに対象として現代語にするという説明となり、一般的には「解釈する」と同意と取られている。また、辞典の編集方針上、新しい解説を積極的に取り入れる『デジタル大辞泉』⁽³⁾には、

1 ある国の言語・文章を他の国の言語・文章に直す。翻訳する。「トルストイの小説を日本語に——する」

2 古語・漢語による文章を、わかりやすく現代語の文章に直す。「源氏物語を口語に——する」

とあり、1では外国語の翻訳をあげ、2において『日本国語大辞典』を踏襲しつつ「わかりやすく」と付言されている。今日の国語辞典の中で購買率が高い『新明解国語辞典』⁽⁴⁾には、

外国語・古文・方言など、体系の異なる言語で述べられた内容

を現代の普通の言葉で表わす(その国の言葉に直す)こと、

また、そうしたものを。翻訳。「現代語——英文和——」

とあり、同時代に限らず異なる時代も併せて解説し「普通のことばで表わす（その国の言葉に直す）」とする。このように「訳する」意義は狭義には他国／外国の言語と日本語との相違を主とし、広義にはそれとともに同じ国内で時代の隔たり（過去／ムカシ）によって差異の生じた語を現代（現在／イマ）の語へと修正する意味合いをもつと理解できる。

以上、訳とは何かについて字書／辞書から概観した。次に古典文学の中でも和歌を〈現代語訳〉することを考えていくが、まずはその対象とともに、参考とすべき研究者の発言を確認していく。

三、〈現代語訳〉による和歌の散文化とリズムの瓦解

今日に至るまで、著名な和歌の現代語訳はいくつも見出せる。

本論では中学校、高等学校等で比較的学びやすい『古今集』を中心として和歌の〈現代語訳〉についてその意義と活用について考えていきたい。

学校教育において著名な和歌への導入期のテキストには藤原定家撰『百人一首』がある。この『百人一首』に採録された和歌の現代語訳のうち小池昌代の功績や、それに関する田淵句美子の指摘は再定義を目指す〈現代語訳〉に有効であろう。田淵は小池昌代訳『百人一首』¹⁵⁾に言及した際に、同書に対して「訳」とあるが、訳だけではない。和歌・その翻訳である現代詩・鑑賞文がセットになっている」と端的にその内容を解説し、特に和歌を現代詩として表現しなおした小池の成果に「現代語訳では表せない魅力を、poetryを、

詩の言葉をついで鮮明に語っているのである」と評した。その際、『古今集』春歌下に詞書「桜の花の散るをよめる」をもつ八四番歌、紀友則の「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」を例にあげ、小池の現代詩「ひさかたの／ひかりあふれる のどかな春／ものみな ゆつたりと／まどろむなか／桜ばかりが ちりいそぐ／静心もなく ちりいそぐ」に対して「この歌は、忠実に散文で現代語訳するとどうしようもなく陳腐になってしまう」と述べ、「八行音で静かにたゆたう上句」と「動態的な下句の、対照と感覚の変化」をとらえた上で「和歌中の歌ことばを重ねながら、立体的に言い表しているといえよう」と分析する。さらに小池が著したあ

とがきの、

古語から現代詩に訳す場合にも、わたしは古の歌人たちの視線を探り、同じものを見ようと試みた。（中略）それは言葉だけではなく、もつと原始的な肉体的な作業であり、**要は身体**のリズムを歌人たちにあわせるということだった。そうすることで、外側から見下ろすように「鑑賞」するのでなく、歌の内側にもぐりこみ、彼らの肉体に迫り、重なりながら、ものを見る**こと**が可能ではないかと考えた。

を引用し、「歌人の眼に重なるうとし、表現意図を還元しようとし、歌が生まれた時に戻ろうとする作業」をする研究者に通じると、評価した。¹⁶⁾

これらの言辞は〈現代語訳〉を考える上でも、またそれらを教授

／享受する上でも重要なヒントとなりうるものである。それは、古語を単に「現代語訳」するのではなく、現代詩として訳す手法を的確に分析した田渕の読解に学ぶところが少なくないが、新たな問題にも気づかされる。たとえば、小池のあとがきからいえば「身体のリズム」であり、対する田渕の言辞でいえば「忠実に散文で現代語訳することへの言及である。

前者の「身体のリズム」は言い換えれば、歌人に寄り添う姿勢といえるが、一方で和歌が韻文かつ定型のリズム五七五七七の上に成り立つことを想起させる。にもかかわらず、そのことが現代語訳には反映されていないことを再認識させる。また、後者の「散文」からは、現代語訳を行うことが、実は韻文を散文化することであり、やはり五七五七七のリズムを瓦解することを思い起こさせる。

和歌には五七五七七のリズムがある。これを第一義として今日でも学校教育では学ぶ。そのために音読し、リズムを体感させることが指導される。しかし、従来の現代語訳となるとどうであろうか。たしかに古典和歌や後の近代短歌などを現代語に訳す際に、しっかりとリズムを意識して訳す者が存在しないわけではない。たとえば現代歌人を代表する俵万智が実際に行っている⁽¹⁷⁾。

だが、現実的な問題として、訳者や、和歌の学習者の現代語訳には、いわゆる五七五七七の「リズム」はどこまで意識されているだろうか。田渕もまた「現代語訳」は「散文化」されることと認めている近時、実際に現代語訳を学生に求めてみると、そこにリズムは意識されてはいなかった、という回答もあった⁽¹⁸⁾。この点は古典和歌を外国語訳する海外の研究者のほうが、語数やリズムを意識的に考

慮して自国の言語に翻訳している傾向があるようにも思われる⁽¹⁹⁾。

つまり、和歌を「現代語訳」する上で田渕のいう「散文化」は日本の教育あるいは研究上、当然の仕儀として理解され浸透してきた。もちろん、和歌は上句から順に情報が開示され、下句に至って結びとなるものであり、〈現代語訳〉をする上では〈ワカラナイコト〉を〈ワカルコト〉に転換させていくことを主眼とし、一度だけの読みでは明確にはならない場合には想像力を働かせ、繰り返し読んでことや情報を収集することによって、表現上の多様な修辭法（枕詞・序詞・掛詞・縁語・倒置）などを見出し、適切な語句を創造することで〈現代語訳〉として言語化が図られていく。

ここに文字数や音数の加減は必要なことであるし、「散文化」は自明であるという見方も理解される。しかし、定型化した古語の韻文を現代語の散文と同列のごとく扱うことには問題が生じる。「散文化」が当然であるというところを終着点にすることから、さらにもう一步考察を加えることがあってもよいだろう。たとえば、それは一度目の読みと二度目以降の読みの違いを探究することであったり、〈現代語訳〉を複数用意することでさらなる多様性を認め、相対的に理解を深めることになる。その点、田渕は、

現代詩の訳はともわかりやすく、著者は小中学生にも伝わるように心を砕いたのではないか。小中学生が音読しても楽しいものが多い。

と、現代詩訳をした小池の成果は小中学生にもよい、と認めている。

そこには、詩に訳したことの選択も大きく影響しているだろうが、和歌のリズムを完全に捨て去ることなく、同じ韻文という枠の中で置き換えてみせたことが効果を生み、評価されているといえよう。ただし、稿者は現代詩を短絡的に推奨しようというのではない。たとえば既存の現代語訳には何がどのように表れているのかをより追究し、そこに存在する思考やことばの多様性を見出す〈現代語訳〉として活用すべきであると考ええる。以下、検定教科書に載る和歌を例にみていくことにする。

四、紀貫之「人はいさ」歌と〈現代語訳〉の活用

令和三年度版光村図書デジタル教科書、中学校国語3の「いにしえの心を受け継ぐ」に掲載される『古今集』には、紀貫之、藤原敏行、小野小町の和歌と現代語訳が併記されており、「出典 「古今和歌集」 原文は、「古今和歌集」(新編日本古典文学全集11)による。」と明記される。たとえば、紀貫之の和歌は、

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける

人の心は、さあ、どうが変わってしまったのかわかりませんが、昔なじみのなつかしい土地では、花が昔のままに香っていることですよ。
(春の歌上)

という具合である。⁽²⁰⁾ 中学三年生にとって和歌を理解する上で現代語訳は大きな役割を果たすことはいままでもない。もちろん、現代語

訳を最初から示さず、どのようなことばが紡ぎ出され、リズムを生み出し、さらに和歌の意味や内容が明確にわからない、モヤッとした感覚を経験することも教育上は大切だと考えられるし、わかることばかりが学びではないため、訳しにくいところなどを学習者に探させたり考えさせたりする過程も用意されてもよいだろう。ただ、いずれにしても〈現代語訳〉はこの和歌を理解する上で必要とされることに留まらず、批判的に、かつ多様性を認識させるために活用されることが望ましい。

ここに現代語訳を読むことが即、和歌を理解したことにしてしまうことには、やはり慎重になるべきであろう。

たとえば、原文は出典が明らかであるが現代語訳は同じ新編日本古典文学全集(以下、新全集)からの引用かという点、必ずしもそうではない。新全集の現代語訳は、

人の心というものは、さあ変らなかつたかどうか、それは分りませんが、昔馴染んだこの家では、梅の花は昔のままの香りに匂って咲いていますね。

とあり、「というものは」の有無や「なつかしい土地」の付加、あるは何よりも「梅の花」に限定されずに「花」となった相違点がみられる。少なくとも、教科書にたったひとつ載る現代語訳を最初に読んだ学習者あるいは教師も、それを絶対視する／させるのではなく、教科書編纂者によって示されたであろう現代語訳と、右の原文の出典に載る現代語訳の位相差を有効に活用すること、時代の変

化とともに提示されてきた、他の訳者の現代語訳を〈現代語訳〉として活用、比較などを行うことがなされてもよいだろう。それにより、和歌の教授／享受においてもその見方の多様性を知らなければならない。これからの古典文学の教育・研究に今まで以上に必要な視座であろう。

『古今集』の現代語訳に接するときに、まずはその行為は——時にその訳を音読することによって音声によって届く状況もあるだろう——概ね訳者が残した文字化された現代語訳を読むことが主となる。この読む行為には、今日少なくとも二つの意味が存在する。ひとつは訳者のものとして読むこと。いまひとつは読者のものとして読むことである。文学研究において作者論はやや下火となり、テクスト論が主となっている傾向があるのかもしれないし、前述したシンポジウムにおいては「作者」は教授／享受者どころまで重なり、どこまで異なるかも論じられはじめている。そして、和歌以上に〈現代語訳〉には訳者の存在がより直接的に学習者に影響する。なぜなら、学習者もまた自分の〈現代語訳〉を試みることがつねに可能であるからである。その意味では訳者は詠作者によって生まれた和歌を、時代を経て伝える上で、『古典は遺産か?』にも論じられた新たな〈作者〉と理解することも可能であり、加えて〈現代語訳〉を試みる学習者もまた同一の〈作者〉に部類されることになるだろう。

五、紀友則歌と〈現代語訳〉——脱・補助的／従属的役割

右のように和歌と〈現代語訳〉の関係について考えていくとき、「この歌は、忠実に散文で現代語訳するとどうしようもなく陳腐に

なってしまう」と田淵にいわしめた、前述の紀友則の、

桜の花の散るをよめる

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

(古今集・春上・八四)

の今日の現代語訳を多様性を重視し〈現代語訳〉として活用するた
めに、各々を比較し、その訳者の手法のいくつかを見てみよう。嚆
矢として名を残す宣長の訳には、

① 日ノ光リノドカナユルリトシタ春ノ日ヂヤニドウ云コ

トデ花ハ此ヤウニサワくト心ゼワシウチルコトヤラ(古

今集遠鏡)

とある。一読して「ヂヤニ」が目を引く。地域性や時代性をうかが
わせる往時の俗語である。さらに、「春の日」に対して「ユルリト
シタ」と修飾語を付し、春の日のどこかであることと春の日のど
かなさまが、光によって「ノドカナ」と生じていることに言及して
いながらも、さらに「ユルリトシタ」と付加し、前半部の上三句を
冗長に訳すことで、いつそうのどかな様子を表しているといえよう。
「ノドカナ」と一語に収めることをせずに訳したところに特徴があ
る。下二句については、「ドウ云コトデ」や「此ヤウニ」と付記す
ることで、囁目の景に近接して対峙し、花の散る様子にも「サワ
くト」と心の揺れる当惑するさまを言語化している。

『古今集』の現代語訳は数多あるが、近現代において代表的なものをいくつかあげることにより、訳者がどこに注意をしているかを確認しておきたい。また、このような比較こそが多様性の存在を認識できる（現代語訳）となるきっかけにもなる。

金子元臣『古今和歌集評釋』の八四番歌の訳（金子は「大意」という）をみよう。

- ② 大空の日の光のゆつたりとした春の日であるのに、何故に花がこのやうに落着き心もなく、そはく〜とせわしく散るのであらうぞ

金子は和歌の初句にある枕詞「久方の」を意識しつつ訳そうとしている。同書には「此處では日の光と續く意なのを、略して直に「光」にかけた」と言及する。前述の『遠鏡』が「日の光〜」から訳し始めたのと比べても「大空の」と訳し入れたことに工夫が見出せる。さらにいえば、枕詞「久方の」が天をはじめ天象に関する語を導くとはいえず、「大空の」と訳し出したのは金子がさらに先人に学んだこと以上に金子の想像力による語彙の選択があったといえよう。

和歌は初句によってその世界観の導入部分が表示され、以下の方向性が決まる。また短詩型の韻文であり定型であるために、一言一句の和歌内における意味合いも小さくはない。一方、『遠鏡』に通じるところも少なくない。「(遠) ユルリトシタ——(金) ゆつたりとした」・「(遠) ドウ云コトデ花ハ此ヤウニ——(金) 何故に花がこのやうに」・「(遠) サワ〜ト心ゼワシウ——(金) そはく〜とせは

しく」などは参照したと考えてもよく、影響を受けたと考えられる。しかし、初句を「大空の」と示したところに『遠鏡』とは異なる金子の（現代語訳）があるといえよう。次に、『万葉集』や『新古今和歌集』の評釈を著した窪田空穂の『古今和歌集評釈』に載る訳（釈）をみてみよう。

- ③ 日の光ののどかな春の時節に、落ちついた心がなく、桜の花は散ることであるよ。

枕詞の訳し出しをせずに、「日の光」から始めた上で、友則の「春の日に」の「日」を「時節」としつかり言い換えたところに空穂の厳格さが感じられる。このことは前述の①ならびに②が「花」をそのまま「花」と訳していたのに比して「桜の花」と限定し、明示したことも通じてこよう。和歌を訳す上で必要最小限の補足とみれば、八四番歌の表現を極力保とうと詠作者に寄り添った感が強い。次に古今集中の和歌の並び方である配列（排列）に特に注目した松田武夫『新釈古今和歌集』は「通釈」において

- ④ 日の光が、こんなにうららかにさしている春の日なのに、どうしてまあ、落ちついた心もなくあわただしく、桜の花は散って行くのだろうか。

松田は日の光に対して「うららかに」という語を用いている。春の日、日の光に適しているという判断は松田にはあるが、近現代に

【表】『古今集』紀友則八四番歌に関する近年の主な現代語訳

1	金子評釋	大空の日の光のゆつたりとした春の日であるのに、何故に花がこのやうに落着き心もなく、そはく〜とせわしく散るのであらうぞ。
2	空穂評釈	日の光のどかな春の時節に、落ち着いた心がなく、桜の花は散ることであるよ。
3	岩波旧大系	頭注に語注あるのみ。「久方のひかり―日の光。ひかけ。「久方の」はもと枕詞であるが、ここでは「日の」の意に用いた。○しづ心なく花のちるらむ―(どうしてこのように)落ち着いた心もなく花が散っているのだらう。
4	松田新釈	日の光が、こんなにくららかにさしている春の日なのに、どうしてまあ、落ちついた心もなくあわただしく、桜の花は散って行くのだらうか。
5	小学館旧全集	太陽の光のどかに照っている春なのに、その春に背いて散る花は、きつとせつない思いで散っているのだらう。
6	竹岡全注釈	大空の光のどかな春の日に、どうしてこんなに落着いた心がなく花が散っているのだらう。
7	新潮集成	日の光のどかに輝いている春の日に、なぜ、あわただしく花は散るのであるうか。
8	久曾神文庫	日の光もどかな春の日であるのに、落ち着いた気持もなく桜の花が散っているようである。
9	小町谷文庫	日の光のどかに照っている春の日に、どうして桜の花はあわただしく散っていくのだらう。
10	岩波新大系	日の光のどかに照らすこの春の日に、どうして落ち着いた心もなく桜の花が散るのだらう。
11	小学館新全集	日の光のどかに照っている春なのに、その春に背いて散る花は、あわただしい、切ない思いで散っているのだらう。
12	片桐全評釈	天から降りそそぐ光がこんなにのどやかな春の日に、どうして落ち着いた心もなく花が散るのだらうか。
13	高田文庫	日の光がおだやかな春の日に、どうして花はあわただしく散るのだらう。
14	和歌文学大系	日の光のどかに照っている春の日に、どうして落ち着いた心もなく桜の花は散っていくのだらう。

*注釈出典一覧

- 1 金子元臣『古今和歌集評釋』（明治書院、一九〇一〜〇八年、のちに新訂版、一九二七年）
- 2 窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂、一九三五年〜三七年、改訂版一九六〇年、のちに角川書店より『窪田空穂全集』所収一九六五年）
- 3 佐伯梅友『古今和歌集』（日本古典文学大系8、岩波書店、一九五八年）
- 4 松田武夫『新釈古今和歌集 上巻』（風間書房、一九六八年）
- 5 小沢正夫『古今和歌集』（日本古典文学全集7、小学館、一九七一年）
- 6 竹岡正夫『古今和歌集全評釈（上）』（石文書院、一九七六年、のちに補訂版、一九八一年）
- 7 奥村恆哉『新潮日本古典集成19、新潮社、一九七八年）
- 8 久曾神昇『古今和歌集（一）』（講談社学術文庫、講談社、一九七九年）
- 9 小町谷照彦『古今和歌集』（旺文社文庫、旺文社、一九八二年、のちにちくま学芸文庫版、二〇一〇年）
- 10 小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』（新日本古典文学大系5、岩波書店、一九八九年）
- 11 小沢正夫・松田成徳『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11、小学館、一九九四年）
- 12 片桐洋一『古今和歌集全評釈（上）』（講談社、一九九八年、のちに講談社学術文庫版、二〇一九年）
- 13 高田祐彦『新版古今和歌集現代語訳付き』（角川ソフィア文庫、角川学芸出版、二〇〇九年）
- 14 久保田淳・高野晴代・鈴木宏子・高木和子・高橋由記『古今和歌集』（和歌文学大系5、明治書院、二〇二二年）

みる現代語訳には「のどけし」に影響をされる「のどかに」が圧倒的に多い。だが、松田の選択は光の描写として「のどかに」とは異なる語彙であり同音「らら」の繰り返しによるやわらかな語感を伝えてくれる。今、ここで現存の現代語訳をすべてあげるのはしなないが、近年の現代語訳は次の【表】のとおりである。共通している点や独自の語彙が確認できるとともに、その多様性こそ学習する上で有効であることがいえよう。

そのような活用の上で、付記するのであれば、「現代語訳」にリズムをもたせる工夫がより求められることも、学習の段階を考慮しつつ実施していくことは推奨されよう。ちなみに〈現代語訳〉は到達点ととらえる一方で、初学者にとっては出発点でもある。韻文への誘いが日常生活の散文中心の言語活動から実施されるのであれば散文化されたという「現代語訳」も有効であるが、あくまでも和歌を読むことが目的であったとき、それはリズムのある韻文化された〈現代語訳〉こそ到達点と考えるべきだろう。

その過程の中で、語句の選択、あるいはそれ以前の語彙の獲得なども〈現代語訳〉の比較検討には有効であり、何よりもそのような語彙をもつ多様性のある訳／訳者の志向などが言語化されている〈現代語訳〉を単なるテキストの補助的／従属的に留まらせてしまふことは必ずしも適切ではないだろう。

六、おわりに——テキスト理解と〈現代語訳〉の多様性・ 問テキスト性、そしてこれから

〈現代語訳〉は和歌の理解のしかたのひとつが訳者から投げかけられたものである。またそれを読み感じ考える読者の存在があるため、両者間には文字を通じた〈対話〉が生じる。そこには訳者からの一方通行的な投げかけに対する感懐が読者には誘発されるため、当然リアルな対話とは異なり、読者が誘発された内容を訳者に返すことはなかなか現実的ではない。ただし、ひとつの〈現代語訳〉が絶対的に正しいとか、正確である、といった判断はつげにくい、ひとつの〈現代語訳〉を知ることでも「ワカラナイコト」が「ワカルコト」になったと思ひ込む傾向は少なからずある。無論、そのことは必ずしも間違っているわけではない。だが、〈現代語訳〉の活用のしかたはまだ考える余地がある。近年、白石良夫⁽²⁾は、訳に関して「移し替える」と改め、以下のように説明する。

古典を現代語（当代語・口語・俗語）に移し替える行為のその先蹤といえ、中世禅籍の抄物があり、近世では漢籍の国字解などが浮かぶ。いずれも外国語文献の翻訳であるから、その日本語訳文が現代語になるのにさほど違和感はなかったであろう。それにひきかえ、わが古典（和文）の現代語訳、とくに「歌語Ⅱ雅語」の意識が染み付いた和歌において、その俗語訳を試みるには多分に抵抗感があったことだろう。

ここには往時の和歌にみえる雅語に対して、それらを俗語訳にすることには「抵抗感」があったことを想定する。ここにいう「抵抗感」には「雅語」ならではの威厳や畏怖の存在、あるいは不敬意識へのそれが想起されるといえばよいだろうか。いわゆるカノンとしての意識を壊しかねないことを想起してもよいかもしれないが、往時の人々が「抵抗感」をいつ、どのように感じていたのか、興味深い指摘ではあるが、必ずしも明確に述べられてはいない。また、今日の〈現代語訳〉を行う側の意識には、俗語化への「抵抗感」が存在しないとも言えない。できるだけ原文に忠実に、という方針があるならば、それは「抵抗感」に通じているとも考えられるためである。

このような「抵抗感」が生じたとしても、意味が〈ワカラナイ〉ことを〈ワカル〉ことにしたい欲求が勝れば、〈現代語訳〉への道は拓かれていくことになる。ただし、〈ワカル〉こととはどういうことなのかもまた問われなければならない。そこには〈ワカル〉ことにも限度や制限がかかること、あるいは限定的に〈ワカル〉ことを指摘しておく必要がある⁽²⁾。言い換えれば、和歌を訳すことは、繰り返すが、あくまでも訳者の読みのひとつが示されたことにすぎず、読者は〈現代語訳〉を批判的に教授／享受し、多角的にとらえていくことを基本的な姿勢としてもつ必要がある。前述した白石はさらに前節に続き、

それを試みたのが本居宣長の『古今集遠鏡』である。古今集の現代語訳の嚆矢というだけでなく、古典を当代語に翻訳して

成功した最初の例である。

と「現代語訳」の嚆矢として冒頭の宣長をあげる⁽³⁾。この宣長をはじめ、注釈の成果としての〈現代語訳〉についてそこに存在する問題意識をもとに論じてきた。従来の現代語訳は多様性の観点が十分ではなく、散文化されることを当然とすることへのひとつの問題提起である。ただし、テキストの定型化である五七五七七が瓦解されかねないこと、原文との併記の問題、さらにはリズムと〈現代語訳〉の問題もまだ論じるべき点があるだろう。また、学習の始発点に〈現代語訳〉を据える意義には、何よりも間テキスト性をここに意識することにより和歌のテキストが理解されることを積極的に再考すべきである。このことは日本国内の研究史に限らず、海外の研究者も交えてより深めていくことであろうし、和歌に限らず広く日本文学に應用できる課題であるが、このことは指摘に留め、別の機会に譲りたい。

注

- (1) 久保朝孝編『危機下の中古文学2020』（武蔵野書院、二〇二〇年）
- (2) 国文学研究資料館では「日本古典と感染症」が動画配信された（ロバート キャンベル、国文学研究資料館<https://www.nijl.ac.jp/koten/learn/post-14.html>（二〇二〇年四月）、久保朝孝編前掲書にもコロナ禍への言及がある。

(3) たとえば「在原業平の和歌力」と題して講演をする機会を得たが、そのときの参加者は講演直後に「今日は参加してよかった」と言い

残してくれたことは、業平の和歌力から派生した間接的な(回復力)のようなものである。

- (4) 「テキスト遺産の利用と再創造——日本古典文学における所有性、作者性、真正性」(二〇二〇年七月十八日早稲田大学オンラインワークショップ)などはイタリア・カフォスカリ大学のエドアルド・ジェルリーニが主体となって構想、企画したものであった。一聴衆者として傍聴したが根本的な問題意識は今後、あらゆる点で求められることであろう。当日の開催報告は河野貴美子による <https://www.waseda.jp/fas/gis/news/706> に掲載され、Eduardo GERLINI・河野貴美子編『古典は遺産か?』(勉誠出版、二〇二一年)によって刊行されている。また、近年では「現代語訳は乾燥わかめ」・「現代語訳でわかった気になってしまう怖さ」など現代語訳の問題点を提言したものに、木越治・丸井貴史編『読まなければならぬはじまらない——いまから古典を(読む)ために』(文学通信、二〇二一年)がある。

- (5) 『本居宣長「うひ山ぶみ」』(全訳注白石良夫、講談社学術文庫、二〇〇九年)、『本居宣長「うひ山ぶみ」全読解』(右文書院、二〇〇三年)より一部改訂。なお、氏の著作『注釈・考証・読解の方法——(文学通信、二〇一九年)の「天動説は滅びない——まえがきにかえて」は同文の現代語訳から起筆されている。

- (6) 『古今集』の注釈に関しては浅田徹が、二〇二二年十二月十一日全国大学国語国文学会令和三年度冬季シンポジウムにおいて言及した。浅田は「敷島の道のリセット——古今集の注釈——」と題し、「歌道」による伝習から「国文学」の教育研究へ、という流れの中で『古今集』が教授/享受されてきたことを示した。

- (7) 『説文解字』巻四「言語」1713「譯」(「諸子百家・中國哲學書電子化計画」、先秦兩漢・字通 <https://text.org/shuo-wen-ji-zi-yan-bu-zh>)の項。なお、『説文解字』とは、『日本国語大辞典』第二版に中国の現存する最古の字書。一五巻。後漢の許慎の著。永元一二年(一〇〇)成立。小篆(しようてん)の字体によって、

約一万字の文字を五四〇部に分類し、六書(りくしよ)に従って形・音・義を説いたもの。現在にいたるまで中国文字学のもっとも基本的な書として重んぜられている。説文。

と載る、中国現存最古の字書と理解されている。なお、中林史朗の開設するホームページ「雑言」11(<http://www.ic.daito.ac.jp/~outkodou/kosyo/kosyo-125.html>)には字書について、

字書は、中国から漢字を受け入れた日本に在って、その漢字の音や意味を理解する上で、必要欠く可からざる工具書である。漢字の音や意味も時代と共に変化し、現在の漢和辞典に書かれている意味が、必ずしも当時の和語の意味と一致するとは限らないのである。平安時代には平安の、鎌倉時代には鎌倉の、和語としての漢字の意味が存在するのである。

現存する日本人の手になる最古の字書が、空海の『篆隸萬象名義』である。この字書は、梁の顧野王が著した『玉篇』を節略したものと言われている。その後、平安時代中期以後10世紀から11世紀の初めにかけて、「四大辞書」と称される四種類の辞書が作られるが、それは、『新撰字鏡』(漢和辞書)・『和名類聚集』(漢和辞書)・『類聚名義抄』(漢和辞書)・『伊呂波字類抄』(漢和辞書或いは国語辞書)の四種である。

因って、ある漢字を平安時代の人々がどの様な和語の意味に理解していたかを知るためには、当然上記の辞書類を見る必要が有るのである。

とする。

- (8) ジャパンナレッジ『字通』(白川静、平凡社、一九九六年)「訳」(旧字「譯」)の項(字形についての記述)。

- (9) 小島憲之他校注・訳『日本書紀』巻第二十二、五五四～五五五頁(新編日本古典文学全集3、小学館、一九九六年)

- (10) 『古事類苑』文学部二十七外国語学、洋巻第2巻、九七七頁。なお「譯語」は『日本書紀』敏達紀には「訳(譯)語田」に宮を造る記事がある。

- (11) ジャパンナレッジ『大漢和辞典』（大漢和辞典修訂第二版）大修館書店、一九九五年）十巻、六〇〇頁。
- (12) ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』（日本国語大辞典第二版）小学館、二〇〇〇年）「訳」・「訳する」の項。
- (13) ジャパンナレッジ『デジタル大辞泉』（大辞泉第二版）小学館、二〇二二年）
- (14) 『新明解国語辞典第八版』（三省堂、二〇二二年）
- (15) 『口訳万葉集／百人一首／新々百人一首』（池澤夏樹Ⅱ個人編集 日本文学全集02、河出書房新社、二〇一五年）
- (16) 田渕句美子「歌人たちの肉眼で見る」（リポート笠間NO.59「特集 古典の現代語訳を考える」二〇一五年十一月、笠間書院）。田渕は友則歌以外にも大式三位の「有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」に対する現代詩「有馬山／猪名の笹原の笹の葉は／さらさらそよそよ／忘れてしまいなさいというように吹くけれど／忘れたのはあなたでしよう／どうしてわたしが／あなたをわすれましよう」を「サ行音の反復」や「しよの反復」をあけて分析をした上で、現代詩の効用を認めている。なお、近年、千野裕子は「古典の翻案の可能性——実践者の立場から」（『中古文学』第一〇八号、二〇二一年十一月）において、演劇を通じて「解釈と再創造の営み」について論じる。テキストと観客の見ているものを「幻視」と称する観点はリズムや身体を伴い示唆に富む。
- (17) 俵万智『チョコレート語訳みだれ髪』（河出書房新社、一九九八年）なお、俵は『竹取物語・伊勢物語』（少年少女古典文学館、講談社、一九九一年）における『伊勢物語』の訳に現代短歌を用いたことが最初であると後に言及している。以下、参照のこと http://www.for-you.co.jp/four_sakai/akiko/arekore/tawarai.htm 俵は「J」の著者

現代語訳された短歌というのは、悲しいけれど味けない。理屈っぽくて、くどくどして、現代の日本語としても、なんだか変なところがある。古典を訳するための独特の言い回し

——、「ナントカなことがあるのか、いやそんなはずはない」とか「ああナントカであることよ」とか。これらは、試験の答案を書く際に「私は、〈反語〉や〈詠嘆〉を理解して訳しています」というサインとしては、有効なだけけれど。

と現代語訳された短歌を必ずしも肯定的にはとらえていない発言がある。

- (18) 二〇二〇年度中田幸司担当「ランゲージアーツセミナーB」における『古今集』輪読時の学生の発言等。
- (19) 第2回研究会・ワークショップ「世界の中の和歌——多言語翻訳を通して見る日本文化の受容と変容——」における参加者の発言等（二〇二〇年九月三日・オンライン開催、<https://www.waseda.jp/inst/srv/news/2021/10/06/10200/>参照）
- (20) 他に同教科書には藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（秋歌下）・小野小町「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（恋歌二）の和歌と現代語訳が併記されている。
- (21) 白石良夫「五七五七七の現代語訳」（リポート笠間NO.58前掲書）
- (22) 教室内の場面において教師が児童や生徒に「わかりましたか」と問いかけた場合の〈ワカルコト〉は児童・生徒それぞれによって異なることはひとつの例としてあげられよう。なお、ヒトの認識のメカニズムを平明に解説したものに、山鳥重「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学」（ちくま新書、筑摩書房、二〇二二年）がある。
- (23) 『古今集遠鏡』については今西祐一郎も同書『古今集遠鏡』2、東洋文庫七七二、平凡社、二〇〇八年）の解説において、

『古今集遠鏡』は、本居宣長による『古今集』の俗語訳である。書名の「遠鏡」については、宣長自身が冒頭の「はしがき」（稿者注・後掲）でつぎのように述べている。

へらむ物をや（以下略）。

すなわち、世に『古今集』の注釈は数多くあるが、それは、遠くの高山にみえる木々の種類について、それを熟知した土地の者に説明を聞くようなもので、その説明がいくら詳しくても実物に距離を置いた、ことばによるだけの理解には限度がある。注釈書とはそのようなものだ。それに対して、「遠めがね」（望遠鏡）で覗いて見れば、一本一本の枝の長短、葉の色づきの濃淡までが、庭木のごとく手に取るように見える。遠い昔の和歌のことばを今の世の俗語に訳して理解するのは、ちょうどこのようなものだ。それが『古今集遠鏡』である、と。

『古今集遠鏡』（はしがき）

雲のあるとほきこずゑもとほかゞみ

うつせばこゝにみねのもみぢ葉

此書は、古今集の哥どもを、ことごとく今の世の俗語に訳せる也、そもく此集は、よゝに物よくしれりし人々の、ちうさくどもものあまた有て、のこれるふしもあらざなるに、今さらさるわざは、いかなればといふに、かの注釈といふすぢは、たとへばいとほるかなる高き山の梢どもの、ありとばかりは、ほのかに見ゆれど、その木とだに、あやめもわかぬを、その山近き里人の、明暮のつま木のたよりに、よく見しれるに、さしてかれはとゝひたらむに、何の木くれの木、もとだちはしかく、梢のあるやうは、かくなむとやうに、語り聞せたらむがごとし、さるはいかによくしりて、いかにつぶさに物したらむにも、人づて耳は、かぎりしあればちかくて見るめのまさしきには、猶にるべくもあらざめるを、世に遠めがねとかいふなる物のあるして、うつし見るには、いかにとほきも、あさましきまで、たゞこゝもとにうつりきて、枝さしの長きみじかき、下葉の色のごきうすきまで、のこるくまなく、見え分れて、軒近き庭のうゑ木に、こよなきけぢめもあらざるばかりに見ゆるにあらざるや、今此遠き代の言の葉の、くれなる深き心はへを、やすくちかく、手染めの色にうつして見するも、もはらこのめがねのたとひにかな

（なかだ こうじ）

**Reading the Modern Translations : essential for a full
understanding of classical Waka?:
Kokin Wakashu, a potential source for a richer and more
diverse appreciation**

Koji NAKADA

Abstract

In spite of the evolution of web-, or media-based support, a full appreciation of any classical Waka text is a challenge to a modern reader. Taking the initial step to read the “modern translation” as an aid, has always been viewed essential toward the full enjoyment and understanding of the classical Waka text. The modern translations, likely has other functions, not well-utilized yet, that would effectively contribute as an innovative teaching method or as a tool for students to better enjoy the waka poetry texts. The modern translations may have more of a primary role in today’s education or general understanding in the classical Waka, rather than viewed as a mere supplement to the original text. One must recognize the diverse meanings that multiple modern translations of any one classical Waka may offer to dynamically enrich one reader’s process of understanding the Waka, and to refine the reader’s final achievement of full immersion in the classical piece. Unlike having only one modern translation, opening one’s mind to diverse translations that intersect with each other is aligned with the current century where diversity is recognized as a value in every element of the society. Reading “multiple modern translations” of any one classical piece promotes the intertextual enrichment to deepen the understanding of the original texts in any classical literature such as classical Waka.

Keywords: “Modern Translations”, Kokin Wakashu, Diversity, Intertextuality, understanding classical literature, teaching method of classical literature,